

琉球大学学術リポジトリ

不登校の状態にある児童への特別な支援教育(I) : 経過と考察

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属障害児教育実践センター 公開日: 2008-03-10 キーワード (Ja): 特別な支援教育, 不登校, 支援チーム, 枠組み, 教育資源 キーワード (En): 作成者: 石本, 隆士, 緒方, 茂樹, Ishimoto, Takashi, Ogata, Shigeki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/5089

不登校の状態にある児童への特別な支援教育（Ⅰ）

— 経過と考察 —

石本 隆士 緒方 茂樹

Special Educational Needs for Non-Attendance at School (Ⅰ)

— Case Study for Behavioral Changing —

Takashi ISHIMOTO*, Shigeki OGATA**

本研究は、長期的な不登校の状態にある児童に対して行なわれた取組を取り上げ、特別な支援教育に必要な概念構造を発展させることを目指して計画した事例研究である。特に本稿では、不登校における児童の変容と支援チームの取組について、事例の経過にそって詳細に記述し、注目すべきいくつかの点について考察を行なった。まず小学校入学時から不登校に至るまでの様子についてみていく中で、対象児童は周囲の状況を的確に把握し、その期待に応えようとする傾向が強いこと、低学年の段階から自分の自然な感情を無意識に抑えてきていることが予想された。そして、不登校の状態は自身の内面にある葛藤の現れであると捉えられた。次に、小学校最終学年における約1年間の様子を経過を追いながら詳細にまとめた。その中では、特別室登校から在籍学級復帰に至る段階的な変容とそれぞれの時期に出現し周囲から問題とされた行動が注目された。最後に、取組後の経過について、中学校の協力に実施された自尊心に関するアンケート結果も含めた記述を行なったところ対象児童は、小学校卒業後2年を経過しようとする時点でも無遅刻無欠席を続けているという事実と内面的な解決の途上であることが確かめられた。取組の初期において支援チームが行なったことは、現象面だけでなくこころに注目した取組を主眼とすることであった。これにより、児童が変容する過程で観られた問題行動について過剰に反応せず背景にあるこころの有り様を観ていこうとする姿勢が貫かれることになった。そして、このような事例に対する状態の捉え直しを繰り返し行い、その時点でできていること、すでに持っているもの等の中に存在する解決に向かうために利用できる要素を、「資源」という形で支援計画に位置づけていったことは、支援チームの帯びた特徴的な傾向の一つだと考えられた。

キーワード：特別な支援教育、不登校、支援チーム、枠組み、教育資源

Ⅰ. はじめに

1. 問題及び目的

少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議は、2001年4月に報告書「心と行動のネットワーク

クー心のサインを見逃すな、『情報連携』から『行動連携』へと題して、少年の問題行動等に関する状況分析を行い問題行動を防ぐために今後一層充実すべきことを提言している¹⁾。その第一にあげられているのは、「心」の問題への対応である。具体的な対策に触れる部分でも「心」のサインを見逃さないことの重要性を強調せざるを得ないという立場から、これまで以上に踏み込んだ姿勢が観られる。こころの捉え方は様々かもしれ

*Obi Ele. School, Nichinan City, Miyazaki Pref.

**Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus

ないが、子どものことを丁寧に観ていかなければならないという認識は、学校教育関係者の間で広く共有されるようになってきている。こころの問題は、心理学と呼ばれる分野の専門家だけで論議されたり、直接子どもと接する者だけで実践されたりするものでは無くなってきていると言える。

また、21世紀の特殊教育の在り方に関する調査協力者会議は、2001年1月の「21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）」で、今後の特殊教育の在り方の基本的な考え方を示している²⁾。その中には、「通常の学級の特別な教育的支援を必要とする児童生徒に積極的に対応すること」や「学校や地域における魅力と特色ある教育活動等を促進するため、特殊教育に関する制度を見直し、市町村や学校に対する支援を充実すること」が必要であるという考え方が見られる。つまり、通常の学級にいる子どもでもニーズがあれば支援・配慮を行っていくことが、今後の特殊教育では求められているのである。

ところで、すでに各学校において通常の学級に対する支援を行っている制度としては、通級指導教室があげられる。平成5年度に通級による指導が制度化されてからいくつかの実態調査が行われているが、平成5年度～7年度にかけて行われた国立特殊教育総合研究所特別研究「心身障害児の個別指導方法に関する実証的研究」では、通級指導教室が果たす役割として「地域や学校の相談室」「文化や情報の発信地」「学校の教育的資源」などがあげられている³⁾。また、平成9年度国立特殊教育総合研究所「全国小・中学校情緒障害特殊学級及び通級指導教室についての実態調査」⁴⁾では、情緒学級や通級教室がひとつの学校内に設置された学級という役割ばかりでなく、より幅広く地域の中での役割を担っていけるかどうかについて示唆を与えている。当初より、通級指導教室担当者には、特殊教育の専門性を生かして通常の教育へアプローチすることが求められてきた。今後、学校教育全般に特別な支援の発想が根付いていくためには、この通級の制度を特別な支援教育という枠組みから捉え直し、さらに先進的な取組をしていくことが必要である。そして、特殊教育担当者と通常教育担当者との望ましい関係性について検討し、校内の職員と連携をとっていく中で起きる

事象に対する捉え方や担当者の関係調整能力などについての具体的な提言が必要だと思われる。

そこで、本稿では、不登校における児童の変容と支援チームの取組について、経過にそった事例の変容を詳細に記し、いくつかの考察を加える。ここでは、特にこころに注目した特別な支援を進めていく中で、子どもと関係者に起こっている具体的なプロセスを順を追って明らかにしていくことを主な目的とする。尚、この事例報告を基に、特別な支援教育を考えるための支援組織の在り方などについては、別稿で改めて詳細に述べる予定である⁵⁾。

II 方法

本研究の対象は、学校という単位集団における特別な支援教育という現象そのものである。このような複雑で特殊な現象を捉えるのに適しており、特殊な文脈や特別な場で行われる社会的相互作用を考慮に入れながら分析を進められることから、本研究では事例研究法を採用する。この方法は、心理学で多く行われる数量的なアプローチのように、すでに存在している一般的な理論やそこから引き出される仮説を検証するものではない。どちらかと言えば、限定されたトピックや問題領域に適応できる新しい理論の発見や開発を行うことに適しているものだと考える⁶⁾。

本稿では、特に小学校における不登校の事例を対象とし、再登校に至る年に行なわれた取組を中心に分析を加えていく。筆者らは、児童への直接的な関わりや支援チームの調整を行う中で、児童の状況をどのようにとらえ、どうアプローチしていけばよいかを繰り返し検討した。ここでは、事例研究としての妥当性を高めるために、少なくとも3つの立場による記録を行った。すなわち学校内で準公簿として取り扱われた生徒指導の記録及び通級指導教室日誌、そして、毎月の校内生徒指導対策委員会における経過報告書である。

生徒指導の記録は、日々の生徒指導に関わる出来事を生徒指導主事が記述し、教頭と校長とで回覧を行った。また、通級指導教室日誌は、通級指導に関わる毎日の出来事を特殊教育事務職員が記述し、特殊教育主任、言語教室担当者、校長、教

頭が回覧した。生徒指導対策委員会とは、校内の生徒指導に関わる事例が話し合われるもので、校長、教頭、教務、学年主任、生徒指導主事、生徒指導部長、養護教諭が委員となっていた。この会で話し合われた内容は、教頭により市教育委員会へ報告されている。どの記録内容についても、全職員の完全な参加とはならないが、関係する複数の職員や学校内で責任ある立場にある者が目を通している点で、その客観性については概ね信頼できるものと考えられる。

尚、これらノート形式の資料は、例えばインタビューの音声による記録などといった他の形式のものと比較し、必ずしも詳細で十分なデータとは言えない面もある。しかし、不登校状態にある児童の様子について直接的な記述がなされ、そのテーマに関連する事象まで補完して書かれているため、数量的なデータ以上のものを提供する可能性が大きいと考え、今回の主な資料とした。

Ⅲ 不登校児童の状況と取組の経過

ここではまず、具体的な取組を始めるまでの状況について述べ、その後の取組へつなげるという点に焦点をあてた考察を行なう。対象児童（以下、A子と記す）の家庭は、父親、祖父母、2歳上の姉の5人家族である。長期の不登校状態となったのは、4年生からである。

1 不登校状態になる前までの様子

小学校1年生時から不登校に至るまでの様子を順を追って見ていく。1年生は風邪で6日、2年生はマイコプラズマ肺炎とインフルエンザ様風邪で7日、3年生は風邪で2日の欠席がある。これまでは、特に気になる記録はみられない。ただ、2年生の時には、両親の離婚により中央の都市から転入し、父方の祖父母と共に暮らし始めている。

4年生の12月からは、図1のように連続した欠席が多くなる。第3週の月曜日に休んだ後、木曜日から日曜日と祝日をはさんで連続7日間の欠席がある。風邪が主な理由であった。後に行われた家族との相談では、この時期から不登校が始まったと捉えられていることが分かる。1月から2月中旬まではインフルエンザ、その後は体調不良や家庭の事情で欠席している。1月26日からは、学

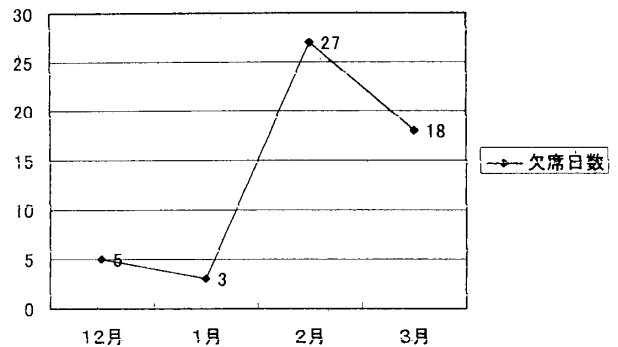


図1 4年生の月別欠席状況

表1 記録にみられる行動などに関する記述

特性	試験中に観られる表現
協調性 思いやり	送る会でプレゼントの花を丁寧に仕上げた。友達にやり方を教えてあげることができた。友達に対して優しく接することができ、仲良くでき好かれている。集会係としてみんなに楽しんでもらうために、いろんな本から楽しい遊びを探し出し、それを実行していた。情緒障害通級指導教室へ通う男子児童に積極的に関わり、情緒的な混乱を起しているときになぐさめる姿が目立った。誰に対しても穏やかな態度で公平に接することができるので、信頼されている。常にクラスの和を考え、集団での遊びを計画実行していた。ラインサッカーの学習に意欲的で、チームメイトと作戦を立てて試合に臨むなど楽しく活動していた。卓球クラブに入り、4年生のまとめ役として活動するとともに、生き生きと運動を楽しんでいた。グループで学習や作業に取り組む際には、常に遅れがちな友達と励ましたり助けたりして進めることができる。
控え目 真面目	行動は控えめで目立たないが、自分の役割をよく自覚し、きちんとやるべきことを果たすことができる。大人しい感はあるが、芯がしっかりしている。説明をよく聞き、判断をするので、理解力がある。学習中目立つことはしないが、真面目にこつこつ努力するタイプで、ノートの整理など上手にできる。

年末休業まで登校していない。

小学校入学時から残されていた担任による記録をみると、表1のように協調性や思いやり等、周囲を意識した行動に関する記述が多い。また、自分を表に出すことは少ないが、いわゆるしっかり者であることに関する記述もある。

2 不登校状態になってからの様子

5年生では、4月に3日間登校しているが、全て早退している。その後は、不登校の状態が続き、精神的なものによる不登校と判断され9月2日から市の適応指導教室へ通う。適応指導教室とは、市教育委員会が行う不登校対策事業の一つである。学校へ登校できない児童・生徒が自主的に通う再登校までの受け皿となっている。ここへ通った日数は、登校日数として公簿に数えられる。この年の11月からは、図2のように適応指導教室が休みの日に学校へ登校するようになる。

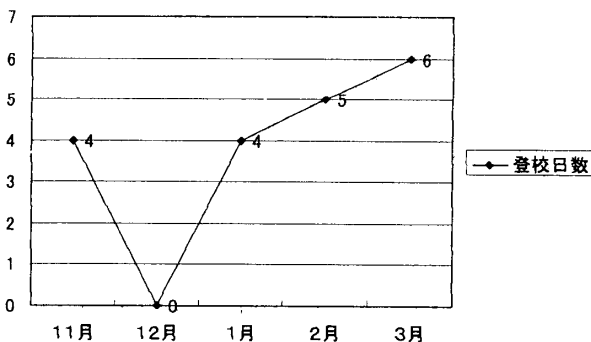


図2 5年生で在籍学校へ登校した日数（適応指導教室の日数は除く）

校内生徒指導対策委員会では、年間を通じて以下のような報告がなされている。

「9月から適応指導教室へ通う。土曜日は休みとなるため、11月からは、土曜日に校長室へ登校するようになる。在籍学級の子ども達との交換ノートには、本人から『土曜日、校長室に来るので、もしよかったら休み時間に来てください。』と書いてあることもあった。また、友だちが参加する市の音楽大会へも『明日、見に行きます。』との文章があったようである。12月には、適応指導教室の昼食会に担任が参加する。その際、料理を作って担任をもてなす中で、

生き生きとした表情が観られる。2月初めの学習発表会には、父親と一緒に来て同じ学年の発表を観た。在籍学級の子ども達とは、交換ノートを通して交流を続けている。A子と仲の良い級友は、休日などにできるだけA子を遊びに誘うようにしている。3月も適応教室に登校している。参観日は、校長室登校をし、子ども達とも休み時間を通して交流ができた。次週の同じ曜日にも校長室登校をし、飼育小屋でえさを作ったりウサギの世話をしたりすることができた。子ども達とも飼育小屋で交流し、明るい表情が観られた。次週の初めの日にウサギを動物病院に連れて行くため、朝、一人で登校できた。翌日に計画しているお楽しみ会の話を出しても表情は硬くならず自分が得意な事などを担任に話す。この日、招待状を届けに在籍している学級の子ども達が行き、楽しく遊んだようである。校長室への登校については、毎回、次週の何曜日に来るといった計画を自分で立て校長へ伝えてから帰る。その計画に忠実に従い、変更には抵抗を示す傾向がみられる。」

3 考察

行動面の記録にみられる表現からは、A子の心理的な傾向として、周囲の状況を的確に把握し、その期待に応えようとする事が予想される。また、2年生時に母親と離れており、低学年の段階から自分の自然な感情を無意識に抑えてきていると思われる。さらに、不登校状態になってからは、祖父母への反抗的な態度が見られることも合わせて考えると、不登校の状態は自身の内面にある葛藤の現れであると捉えることができる。

ところで、A子は、専門機関により精神的なものによる不登校と判断されている。判断が出ているということは、その部分が事例における最も重要なところであり、また、容易には変えられないということの意味していると考えられる。よって、A子が精神的な課題を解消していくことが、本事例における課題の本質であり、不登校はあくまでその状態像であると考えに至った。

以上のことから、過剰適応に向かいやすい心理的傾向に留意し、今後の取組にあたってはA子の意志を尊重した関わりを工夫していくことにした。

具体的には、A子に「自分自身の力によって成長した」という実感を持たせることが肝要であると考え、主体的な目標設定と目標達成による成就感を経験させていく中で健全な自尊心を育てていくことを取組の主眼とした。

状態を捉える時には、現在A子ができていることの中に教室環境のどのような要素が存在するかを吟味していく方法をとることにした。具体的には、人的要素、物的要素（場所、音、景色など）、行動（期待される行動など）、時間の流れ・生活のリズムといった側面を観ていき、どのような順序と強さで現在できているこの中へ新しい要素を取り入れていくかを吟味していくようにするということである。

Ⅳ 児童の変容と考察

次に小学校6年生時における児童の変容について観ていく。A子の年間を通じての変容は、表2のようなものであった。

以下に、直接関わった職員や保護者の動きも含め、週ごとにまとめる。そして、それぞれの時期ごとに考察を加えることにする。尚、週の番号については夏季休業中と冬季休業中を入れずに授業が行われている週を数えた。また、A子の在籍していた学校には、知的障害特殊学級、情緒障害通級指導教室、言語障害通級指導教室が設置されている。さらに特殊教育に関わる職員は、特殊教育事務補助員を加えて5名配置されていた。

1 新年度開始の時期

(1) 経過

始業式の日、在籍学級担任の発表が行われる。A子の家庭には、担任から電話で受け持ちになった挨拶を行う。この職員は、以前にA子の姉を担当しており、保護者の信頼も得ていた。電話でも喜んでいる様子が見えられたため、A子の周囲で担任に対する好ましい情報の交換が期待された。電話の際に、特殊教育に関係する教室へ遊びに来るよう提案してみる。二日目、A子は9時過ぎに登校する。情緒教室担当者、言語教室担当者（2名）と一緒に入学式の準備や飼育小屋に飼っているウサギの世話をする。

第3週になり、A子の特殊教育関係教室への登校という形態が定着してくる。朝9時前に登校し、午後は友だちであるB子と一緒に下校する。給食も食べるようになる。下校の際は、他の児童がほとんど帰った時間帯が多い。昼休みには、同じクラスの児童が特殊教育関係教室のプレイルームに来て、一緒に過ごす。週の初めの放課後に父親が来校し、校長、教頭、担任と共に話し合いをする。教科学習については、もう少し様子を見ながら取り組んでいくこと、上履きについては本人が希望すれば履いていけるように環境を整えること、靴箱についても同じように環境を整えることを確かめる。また、カウンセラーの件は、保護者が望むのなら連絡をすることも確認する。次の日からは、上履きを履き、在籍学級の靴箱を利用するようになる。

第4週には、給食を2、3人の友だちと共に食べるようになり、ラジオをかけながら食べている。コーヒーメーカーの使い方を覚え、校長（前年度の校長は異動している）や特殊教育担当職員にコーヒーをいれる。家庭訪問で児童が早く帰ると、南校舎を中心に友だちと一緒に動き回る。一輪車や三輪車に乗って動き回っていることが多い。給食の時にトイレを我慢しているのでは、どうしていけないのか尋ねると、「だれかに見られると恥ずかしい。」と答える。土日も学校に来たい様子で、学校が開いていないことを残念がる。たまには休むように言うと、「もう、たくさん休んでる。」とつぶやく。在籍学級の担任は、一日のうち何度も顔を見せて話をしていく。1年生担任や図書担当職員からは、色々な仕事を依頼される。A子自身が保母を目指していることもあり、色画用紙や折紙を使って1年生の誕生カードや図書室の掲示物を作ることは意欲的である。言語教室担当が主に関わっているウサギの赤ちゃんやモルモットをずいぶん気に入っており、特にウサギはよく抱いている。

第5週の初日は、連休明けだったが、前週と変わらない日程で一日を過ごす。取扱いに注意が必要な文書が保管されている特殊担当者職員室への出入りについては控えさせるよう、知的障害学級担任から注意がある。火曜日は、朝7時近くに登校する。1アール園（中庭にある主に理科や生活科

表2 特別室登校から在籍学級へ復帰するまでの経過

学期	1 学 期								2 学 期								3 学 期						
月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3												
週	2	4	6	8	10	12	14	16	18	20	22	24	26	28	30	32	34	36	38	40	42	44	46
在籍学級での生活へ近づいていく出来事 ↓	<p> 特殊学級教室への登校定着 給食を食べる。 入学式準備を手伝う。 2, 3人で給食を食べる。 朝早く, 在籍学級教室へ行く。 毎日の予定を話し合う。 眼科検診受診 時間割の掲示 絵を貼りに在籍学級教室へ行く。 国語の自主学习 在籍学級隣接ベランダでのウサギの世話 (特殊事務補助と一緒に) 特殊教育担当者職員室の掃除 プール学習への参加 (約1週間の欠席) 飼育委員会救護班となる。 総合的な学習の時間への参加 (参観授業での発表) スケッチ学習への参加 (祖父母との話し合い) 修学旅行の計画を立てる授業への参加 修学旅行への参加 調理実習への参加 自主学习への取組 社会科プリントへの取組 身体計測への参加 毎日違うグループとの給食 全校での集団下校へ参加 1日を在籍学級で過ごす。 朝のボランティア清掃へ参加 在籍学級での生活が定着 委員会への参加 クラブ活動への参加 専科への参加 卒業式への参加 </p>																						
調整された行動	<p> 校内を三輪車で走り回る。 特殊教育職員室への出入り 弁当持参の早すぎる登校 遅すぎる下校 昼休みのプレイルーム使用 ウサギの室内での放し飼い 早朝の友人宅訪問 テレビを見ながらの給食 遅い下校時刻 友だち関係のトラブル </p>																						

で使用する農園)での作業をした後、家から持ってきたお弁当を食べたようである。その後、B子が宿題を提出するので、一緒に2階にある在籍学級の教室まで上がる。不登校状態の中学生であるH子のことを話すと、10時に自宅まで行き様子を見てくる。「やっぱり風邪で、前よりひどくなっていた。」と報告する。H子の飼っている犬を連れてきてよいかというので、一応、受け入れる。この日、友だちのB子が少年団の練習がある。このため、放課後遊べないということで、15時過ぎに下校する。

第6週、5月に入る。いつもより遅く（9時）登校したので理由を尋ねると、中学校の友だちの家に行き話をしてきたと答える。ころとことばの教室（通級教室の呼称）へ一緒に行こうと1時間ほど誘ったようだった。5時半まで学校にいてもいいかと聞かれたため、言語教室担当者が4時半が下校時刻なのでその時間までには帰ると伝える。担任が予想したように、同学年の児童が帰る時間帯は避けたいのか、「3時ぐらいに帰ろうかなあ。」とつぶやく。特別教室に置いてあるワープロでアイドルグループのカードや絵本の文章を入力していた。また、色画用紙で母の日の飾りを作る。昼休みには、女子3名とプレイルームで遊び、満足している様子だった。

第7週、昼休みにプレイルームで過ごす児童の中で、グループができていく様子が見え始める。遊びの誘い方に少し強引なところのある児童に対して、A子が苦手意識を訴える。気持ちを受け入れながらも、様々な児童との関わりが必要だと考えたため、対象となる児童に対して特にアプローチはしない。グループ間の問題については、出張している学級担任の帰りを待ち検討する。

第8週、特別教室後ろの黒板を使い、A子と毎日の予定について大まかに確かめていくことにする。13時過ぎに一度下校し、犬を連れてB子と学校へ来た日も、あらかじめ決めておいた予定にそって4時30分に帰る。また、昼休みのプレイルーム使用についてA子と話し合う。他の学年の児童からも遊びたいとの要望が強く、A子達だけが遊んでいることに疑問を持つことが考えられる。A子にこのことを話し、理由付けを一緒に考えていくことにする。

第9週は、教科学習の要素を加える。5時間目と同じ学年の国語の学習を、在籍学級の授業進度に合わせた形で行う。担任の働きかけにより、詩のイメージを絵にすることができる。また、昼休みのプレイルーム使用については、遊具を使用せずテーブルの上での活動を行うよう提案したところ、受け入れることができる。詩のイメージ画を掲示するため、在籍学級の教室へ行くことができる。学級の児童は専科のためいなかったが、ウサギを抱いて上がることも含めて2回ほど、教室まで行くことができるようになる。在籍学級の時間割を普段居る部屋に掲示するが、特に不安な様子は見られない。また、給食のことで話し合う。ウサギを放している特殊学級の後ろでは、衛生面で問題があることを伝えたところ、素直に受け入れることができる。このため、給食は隣の言語指導室で食べることになる。栄養職員からは、ウサギのかごを置く場所として、手洗い指導を行う場や多数の児童が触る場所は望ましくないと指導がある。担任の誘いに応じて校内で行われた眼科検診を受ける。

第10週（6月）は、前月の初めと同じように健康観察の時間以前に登校し、知的障害特殊学級の後ろで主に絵を描いて過ごす。耳鼻科検診に誘うが、耳が悪いことを気にする様子があり、行こうとしない。市の適応指導教室で知り合った中学校で不登校にある友だちの件では、和やかに会話ができる。

(2) 考察

この時期は、大きく3つの時期に分けられると考えられる。まずは、第5週までの期間で、特別教室登校を中心とした取組の基本的な方向性が定まってくる時期である。次は、第6週と7週に渡る自己を開放する行動が観られる時期である。その後の第8週から10週の期間は、学習へ挑戦する行動が出現する時期と捉えられる。

新年度2日目の様子から、A子は特殊教育関係の教室なら登校ができると思われた。そこで、この日に特殊教育に関わる職員で話し合いを行い、以下の方向性を定めた。

- 知的障害学級の教室を二つに区切り、東側をA子が一日を過ごす部屋とする。
- 3名の通級指導教室担当で、A子への関わ

り方について特定の役割を持つ。

- 飼育委員会を担当している言語障害通級指導教室担当者は、動物への関わりを通じてA子との関係作りを行う。
- 情緒障害通級指導教室担当者は、特殊教育の主任であり生徒指導主事でもあるため、A子に関する取組を総括する。
- 知的障害特殊学級担当者、図書担当の言語障害通級指導教室担当者、特殊教育事務補助は、A子に作業などの手伝いを依頼する中で関係作りを行う。

ここで行われたことは、学校内の居場所づくりと直接関わる職員の人選及び役割の分担だと捉える。取組の初めに当たり、まず、A子の心理的安定を図る土台を築くことができたと思われる。そして、「誘う」という形で学校内で必要とされていることを強調するような働きかけを行い、A子に登校する目的を作っていた。

第6週と7週には、あまりに早すぎる登校、特殊担当者職員室への自由な出入り、三輪車などによる廊下走行、不衛生な環境での給食などの行動が観られるようになる。数名の職員から問題視する意見が出されたが、筆者らは状況の捉え直しを行い自己を解放する行動として位置づけることにした。そして禁止するのではなく、方向を転換することを基本的な姿勢とする。A子と筆者らとの間で繰り返された口数は少ないが時間をかけた会話の中で、職員室へ出入りする際には、用件を言ってから入る。三輪車の廊下走行は、児童が帰った後に範囲を限定して行う。給食は、別室で食べる。昼休みのプレイルーム使用は机上での活動に限定する等の方向転換がなされた。また、始業時刻の1時間以上前に登校する行動は、他の児童と会いたくないという気持ちの現れだと考えた。A子が「朝、7時に来て、畑の仕事をしてもいいですか。」と聞いてきたとき、「うん、いいよ。でも、あんまり早く来ても学校が開いていないから、7時半に来ようか。鍵をあける先生は、いつも7時半に来ているよ。一緒の時間に来るようにしない？」など、A子の主張に反対せずに望ましい方向へ向けていくような言葉かけを工夫した。そして、職員間では、1学期の終わりまでには登校時刻を他の児童と同じにする等、長いスパンで考えていく

ことを確かめ合った。このことによって結果的に職員のアセリから来る先走った働きかけが防止されたと考えられる。

また、第9週には、教科学習への取組を提案し、在籍学級の進度に合わせた内容に取り組むことができていた。この時点までに知的障害学級の児童に対する援助という形で教科学習の要素を体験させていたが、在籍学級児童と同じ靴箱に上履きを入れておくことから始まり、校時程の掲示、時間割表の掲示といったように、A子の様子を確認しながら徐々に在籍学級にある環境などの要素に近づけていく方法の有効性が実感できた期間だと考える。これ以降、学級担任を中心に数々の新たな提案がなされていくことになる。

2 1学期後半

(1) 経過

第11週、A子は在籍している教室に隣接しているベランダまで移動させたウサギの世話をを行う。同じクラスの児童が近くにいるにも関わらず、安定して過ごすことができる。この後、1時間目から3時間目までを過ごすこともできるようになる。

第12週には、校長のところへウサギの柵のことで相談に行く。土曜日に担任と情緒教室担当者が協力して行なう授業について予告すると、「プレイルームよりは外でしたい。」と言う。夏休み中に計画されている宿泊学習への誘いを行うが、特に抵抗は感じられない。プールでの授業に対する考えを聞くが、あまり積極的に参加する希望は無いようである。午前中は、ウサギのいる3階へは上がろうとしなかった。しかし、かごの外に出していないことで、心配はしている口調だった。いつも来ていた友だちであるC子とけんか中だと本人から言い始める。大島でのキャンプにB子と2人でいきたいので、秘密の話をする等と言って仲間に入れずわざとけんかをしたということである。不登校の日子(中学校2年生)の自宅へ行き、適応指導教室へ誘う行動が見られる。

第13週もウサギの赤ちゃんの世話を積極的に行う。ベランダには、昼休みも含めて数回上がっている。水泳のことについて打診すると、火曜日の4時間目に特殊学級の児童が泳ぐならば一緒に行ってもいいと言う。清掃の時間に特殊教育担当者の

職員室を掃除した後、「ウサギの小屋を掃除したいが、一人では3階まであがれない。」と言うので、特殊教育事務担当者が一緒に行く。

第14週、後半から7月に入る。同じクラスの児童6名が、A子と遊ぶということで昼休みに言語指導室に来ていた。しかし、置いてあるパソコンやオセロゲームで遊んでいることの方が多かった。翌日は、朝7時前に仲の良いB子と登校し、飼育当番の手伝いをする。B子の祖母から、早朝の訪問について指導するよう要望があったため、事情を聞く。B子の家の前で出てくるのを待っていただけとのことである。B子にも事情を聞くと、祖母からは、遅く帰るのだけは止めるように注意されたとのことであった。特殊学級や通級生の児童らと一緒にプールへ入る。クラブで友だちと放課後遊ぶ時間がない日は、14時20分に下校する。いつもいる教室では、図書担当の職員を手伝い、掲示物を作る。昼休みに10名ほどの友だちが来ていた。A子は、あまりにたくさんなので何人か帰ってもらう人を選ぼうとしていた。どんな人とも仲良くするための勉強をした方がよいと話すと、素直に受け入れる。その後は全員でミニバレーボールを使って過ごしていた。清掃の時間には、特殊教育担当者の職員室を自分から掃除するようになってきた。土曜日は、9時に登校し、ほとんどの児童が帰った12時20分に同じクラスのB子、C子と下校する。後述するようなこころの勉強をすることについて提案したところ、一応は受け入れる姿勢を見せる。

第15週は、通級生と特殊学級児童の4人でプールでの学習を行う。夏休みのキャンプについて気にしている様子を見せる。クラブ活動で友だちと遊ぶことができないため、2時半前に下校する。次の日は、友だちの父親のお見舞いに行くと言って3時前に下校する。5時間目にウサギかごの掃除をすると3階に上がろうとするが、一人ではできないので誰か手伝って欲しいと言ってくる。このため、特殊事務補助職員が一緒に上がる。

第16週の給食時間に言語指導室のテレビをつけていたので、特別扱いはできないことを話し消させる。その後、特に落ち込む様子は見られなかった。4時間目にプールで過ごすつもりで自分から水着に着替えていた。いつも一緒に行く児童や教

師が来ないことが分かると、何度か誘ったが行こうとしなかった。15時過ぎまで、主に作品作り等をして過ごし下校する。週の後半に適応教室の先生より交流員との活動へ誘いがある。すぐに返事ができないようだったため、祖母と話し合うことにして下校させる。当日は、適応指導教室へは行かずに、いつもより遅れてくる。ウサギを言語指導室に置いて帰る。

第17週、1学期最終日、給食を食べようとしなかったため話を聞こうとするが、はっきりした理由は分からなかった。男子2名、女子1名の3人で食べており、A子が苦手になっている児童ではないと思われた。5時間目には久しぶりに特殊教育事務補助の職員と3階へ上がり、ウサギかごの掃除をする。担任からいつも過ごしている部屋で通知票を渡され、いくつかの項目について説明を受ける。特に気になる様子は見られなかった。

(2) 考察

1学期後半は、ウサギを世話することを軸に登校の意欲が持続し、行動範囲も広がりを見せた時期だと捉えられる。当初より世話をする場所については衛生面からの問題があることを繰り返しA子に話していたが、この時期にはA子も自分から校長へ相談に行く等、問題を受けとめるようになってきたと判断された。そこで、場所を移動する機会を利用し、在籍学級の教室が見えるように持っていくことにした。これにより、A子は、級友が授業を受ける様子を身近で目にするようになった。尚、担任は、教科学習に対する劣等感を感じさせないように、A子がいる間は学習内容をA子に分かるものに変更する配慮を行っていた。

他にも、父親との話し合いも含めて多方面からの提案がなされていた。それまでは応接用の机と椅子しかなかったA子の過ごしている教室に、在籍学級と同じ児童用の机と椅子を置く。学級で出している通信を、バックナンバーを消して本人へ渡す。その際、1週間に2通ほどから始め、本人がよければ家へ持って帰って家の人に見せるようにしていく。級友が持っている連絡帳を使う方向で徐々にアプローチしていく。家庭での学習を方向付けていく。夏休み中のキャンプについて誘ってみるといったことが検討された。

また、この時期にも方向を修正しなければなら

ないものがいくつかあり、A子と話し合っている。第12週には、給食後の後片付けを徹底するように伝えた。言語指導室やプレイルームを中心として数名の友だちと昼休みを過ごすことについては、部屋にある特別な遊具や動物の魅力に頼るのではなく自分自身の魅力に対して友だちが集まってくるよう努力したらどうかと方向付けを行なった。どちらもやや権威的な関わり方になっているが、素直に受け入れることができていた。

以上のようなアプローチは、ある意味で間接的なアプローチだと言える。すなわち「ことば」による直接的な関わりというよりも、むしろ在籍学級の教室環境に関わりのある品物や物的環境に本人を出逢わせる工夫である。このような関わりは、取組が膠着して山場を越えられなくなってきたとき、本人のおだやかな気づきと自己決定を促しながら進めることができる有効な方法だと考えられる⁷⁾。

この時期に生じた大きな課題の一つとして、筆者らの取組を「甘やかし」だと問題視する他の職員が出てきたことがあげられる。このため、受容と共感を前提とした現在の関わり方を説明し、それで終わるのではなく将来的には変化させていくことを伝え、一応の納得を得た。直接的に関わる職員とそうでない職員の間では、A子に対する受容性と指導性の幅を同じにすることが難しくなっていくようであった。

3 2学期前半

(1) 経過

夏休み明けの第18週初日は、登校しなかった。10時30分前後に担任が電話をかけたところ、登校するとのことだったが、来なかった。次の日は、午前中來なかつたため担任が電話連絡と家庭訪問を行う。担任とは快く話をしたが、学校へ来るまでには至らなかつたようである。父親から電話があり、仕事の関係で今夜は帰宅できないかもしれないと言われる。家庭内の混乱も予想された。また、もし都合がつけば明日の夕方に学校へ来て話したいと言われる。1年生担任から、A子に作業を頼みたいという申し出があった。3日目も欠席する。週の終わりの日、9時30分過ぎに登校してくる。言語教室担当者と話し合い、来週の月曜日

にウサギを病院へ連れていく予定を立てたようだった。この日、1年生担任にも作業を依頼してもらおう。

第19週の初日は予定通り病院へ連れて行ったのだが、翌日は登校しなかった。参観日で保護者の姿が多く見られるためではないかと思われる。次の日も欠席であったが、土曜日には登校し最後まで学校で過ごす。

第20週の初日は、2学期になり初めて給食を食べて17時に下校する。その後、ずっと午後までを学校で過ごすことができたが、最終日は9時過ぎに登校し2時間目に下校する。集団下校の時間を避けた行動だと予想された。

第21週も前週と同じように9時過ぎに登校してくる。ついたての陰でマンガの本を読んでいる。こころの勉強と称してエゴグラムチェックリストを試してみないかと誘うが、のってこないため無理に誘わないようにする。次の日も同じように登校してくる。C子と給食を食べた後、昼休みを一緒に過ごす。先週の金曜日には、在籍学級の教室まであがっている姿も見られたようである。こころの勉強についても再度誘ってみる。前回と同じであり乗り気ではなかつたため、好きなときにやれるようにリストだけを渡す。同時に行った心理クイズには興味を示して、またやろうというとうん。」とうなずく。

第22週の2日目に欠席をする。運動会総予行練習のためだとも予想される。この次の日から10月になる。1時間目に国語の漢字練習を行っている。今まで世話をしていた白いウサギを昼休みに飼育小屋へ移し、新たに野ウサギの世話をする計画だと本人から教えてもらおう。飼育委員会救護班長を引き受けたようである。4時間目に万国旗の後片付けを頼んだところ、最後まで丁寧に作業を行う。

第23週の1日目は、9時前に登校し、漢字学習など教科学習に関わる活動も少し取り入れながら主に野ウサギの世話をして一日を過ごす。16時過ぎに下校する。週末には、以前に注意を受けた給食の件と下校時刻の件をしっかりと守ることができた。しかし、第24週に下校の状況を見て回ったところ、教育実習生と話をしている児童が7名おり、その中にA子も含まれていた。

第25週には、不登校が明確になってから初めて

在籍学級の教室で授業を受けることができた。総合的な学習の時間に対して興味を示している様子である。漢字の学習に取り組んでいる様子も見られた。こころとことばの教室運動会案内文を渡して誘うと、行きたいと言う。参加費のことを気にしているようだったので、父親とも相談するように話す。給食時間にいつものように同じクラスの児童が5名ほど来たが、急に「帰りたくなった。」と言って下校する。子ども達にも確かな理由は分からないようだった。総合的な学習の時間で行われた研究授業にA子が参加し、グループによる発表を行う。「飴肥のお土産屋を調べる」という希望を黒板に貼ることができる。

第26週の初日は、2校時から午前中を在籍学級のスケッチ学習に参加する。昼休みは、これまでのようにプレイルームで過ごすのではなく戸外で過ごしていた。掃除時間は運動場掃除を同じクラスのC子と一緒にやる。他の児童が下校する時間帯である15時45分頃に、3名の級友と一緒に下校する。週末にA子と給食の件で話をする。野ウサギを移すことなども含めて本人なりに考えているようである。この時、A子は、男子3名女子1名と「仲間を作った」という言い方をする。そこで、B子とC子との関係があまりうまくいっていないことも話題にし、できるなら二人の中をとりもってくれるよう頼んだところ、うなずいていた。

第27週は、修学旅行の計画を立てる授業へ参加する。授業から帰ると、特殊教育担当職員に授業の様子を楽しそうに話す。

（2）考 察

この期間は、2学期の始まりから11月の修学旅行までの時期である。

この中で、夏休み明けから10月中盤までは、徐々に登校のリズムが出来上がっていく期間だと考えられる。初日から続けて欠席したのだが、筆者らはあまり過度に反応せずにしばらく様子を見ることにした。3日目に父親と話し合う中で、夏休みに自転車の盗難にあったショックが大きいこと等が分かった。そこで、ウサギの診察に誘う等、学校に来るきっかけ作りをしていくことを最初の取組とした。登校したのは5日目であった。この前夜、父親は「1学期に世話をしていたウサギが病気なので診察に連れて行くらしい。」とA子に話

している。この話を父親は、たまたまスーパーで会った担任から聞いた話として伝えたようである。このことは、筆者らの重視したA子の自己決定を促す方針が父親にも理解され実行されたトピックの一つだと考えられる。この後も父親と支援チームとの関係が深まっていくが、その過程の中で20週から21週にかけては、父親からの相談を受け、祖父母への介入も行なった。以下にその記録をまとめる。

父親の話では、祖父母がA子に対して学校に行くように強く勧めていること、学校でどのような対応をしているかについて説明しようとするが、なかなか冷静に話し合うことができないこと等の悩みが出された。そして、A子が学校に行っている間に家庭訪問し、祖父母と話をしてほしいという要望が出された。このため、訪問するかどうかの検討や訪問の際の留意点などを、関係者で集まり話し合う。担任を中心に祖父母と話し合いを持つ方向で、祖父母の都合について担任より父親を通して調整してもらうことになる。その後、校長、教頭、担任、情緒教室担当者が参加して直前の打ち合わせを校長室で行う。情緒教室担当者と教頭も一緒に訪問する。訪問の目的は、祖父母との信頼関係作りにおき、祖父母の不安や考え（価値観）などを十分に受容する姿勢で臨む。祖父母から出されると思われる質問などについて、事前に予想できるものについては、関係者で話し合いその対応について準備しておく。訪問後に確認が必要な場合は、関係者で話し合いを持つといった方針を決める。尚、言語教室担当者は体調不良のため参加しなかったが、話し合いの結果については協力することを了解する。

第21週の初めに10時30分から11時20分まで、A子の家庭訪問を行う。教頭、担任、情緒教室担当者が同席する。祖父は、校長経験者であり、地域の教育関係者とも深いつきあいをしていた。しかし、A子のことがあり、そのような集まりにも出かけることを遠慮していたとのことであった。また、最近体の衰えが目立ち、この日も2日間の点滴の後で少しは気分がいいので、こうして話ができている。祖母は、祖父の身の世話や来客者の応対、親戚の世話もあり、とても忙しい毎日である。父親も仕事の関係で遅く帰ることが多い、3

人とも心に余裕が無いことが続いている。祖父母からの話の内容から、A子は2年前の3学期、1月頃に風邪をひき何日か休んだ後から学校に行けなくなったようである。その時は、新しく家を作ったばかりの時、楽しい反面、家庭内も不安定であった。また、A子は、餅まき等のイベントに友だちを呼ぶ準備をして楽しみにしていたのだが、自分が調子悪くなってしまい、気落ちしていた。一番の原因としては、母親を思う気持ちがあると、祖父母とも考えている。家にいる時は、祖父母から離れようとしなが、あまりにべたべたしてくるような時は、怒ることもある。数日前、姉の運動会を見に行ったときに、小さな子が草の上を滑って遊んでいた。そこへ母親が来て顔を拭いてやる場面を見て、「いいなあ。」ともらしていたとのことである。A子は、姉に比べても繊細な方であり、祖父としても「お姉ちゃんよりも将来が楽しみだ」と常々父親に話をしてきた。敬老の日に、紙粘土で作った壁飾りには、「おじいちゃん、おばあちゃん、長生きしてね。」と書いている。嫌ってはいないようである。父親が帰ってくると、寝てしまうまでずっと父親のそばにいる。このため、A子のことについて父親とゆっくり話し合う時間が持てない。夏休みは、図書館へ行き、本（マンガがほとんど）を借りて読んでいたことが多かった。2学期になって学校に出かけていくときは、元気よく「行ってきます。」と言わない。適応指導教室の先生からも、学校ではついたての陰で本を読んでいるような状態だと聞かされて心配している等の話を聞くことができた。この日は、前述のとおり祖父母の話を聞くことを一番の目的としていたので、これからは何かあったら気軽に話をしてもらおうと依頼して終える。その後、校長室において今後のことを話し合う。父親と祖父母が同じ席で話し合う機会を作ることを目標として、担任を中心に父親と祖父母それぞれと学校側との信頼関係を築いていくことにした。

登校してくるようになってからは、1学期と同じように問題とされる行動の方向修正を行っている。第16週には、5時を過ぎてからウサギにミルクをやっていたため、下校の心配、誰もいない部屋にいた場合の心配などを話す。また、ルールが守れないようであれば、子ウサギの世話をしなくて

もよいことを伝える。給食を食べるテーブルにハムスターのかごを置いて、給食をつまんで与えながら食べていた時には、給食に関係する人が衛生管理に気を使っていることをチェック項目など具体的な例をあげて伝える。また、もし食中毒などが起こったら、本人だけの問題ではなくなることも伝える。A子は、静かに話を聞き、「はい。」と返事をしてきた。この後、栄養職員より動物がいる部屋で給食をとることについては、できたらやめるようにと要望があった。そこで、教科書を使わない活動には抵抗無く参加できるようになっていたことから、給食時間を在籍学級で過ごす方向で働きかけていくことにする。この際、筆者らは役割を決めてA子にアプローチする方法をとった。まず、情緒教室担当者は、A子に対して「給食を在籍学級で食べる」「動物を部屋から飼育小屋へ移す」といった選択肢を提示した。同時に担任や言語教室担当者は、本人の相談相手として関わった。このような支援チームの関わりは、A子の意志決定を促し新しい局面へ適応させていく有効な方法だったと思われる。この後、A子は、在籍学級教室で給食の後片付けをするようになる。

また、この時期には、スケッチや総合的な学習の時間において、授業へ参加することができるようになった。そこで、筆者らは、第26週の後半に開かれた校内生徒指導対策委員会で状況を報告し、授業への計画的な参加について意見交換を行った。

- 自分で決めた時間割にそって漢字の練習など教科学習に関する活動をしている。
- 総合的な学習の時間には授業中の教室に入る。
- スケッチでは、みんなと同じ活動に参加できる。
- 給食の後かたづけを教室に入ってできる。

この報告を受けて、その後予定されている修学旅行では、学級をもとにした班編制を行うよう学年で配慮していくという方針が出される。この時期には、A子の校内における行動範囲が広がっていくことになる。それに伴い、全職員にA子の状況について共通の認識を持ってもらうため、必要な説明をしていくことが求められる時期であったと捉えることができる。

4 2学期後半

(1) 経過

第28週に開催された市の陸上教室は、A子と同学年の児童が集まるのだが、A子は参加しなかった。この日は、友だちが学校にいないせいか、午前中で下校する。木曜日から修学旅行に出発する。旅行中には、同学年の児童と一緒に行動し、食事なども全員がいる中でとることができる。

第29週の前半は、午前中を知的障害学級の教室東側で過ごし、給食を食べずに下校する。同じクラスのB子に様子を聞いたところ、朝、電話をかけて話をしたが、特に困っている様子はないと言うことであった。木曜日になり、修学旅行後、初めて給食を食べる。5時間目は、在籍学級に行き翌日の調理実習の計画を立てる。

第30週の水曜日、午前中を特殊学級の教室で過ごし給食時間に下校する。A子は、祖父母が夕方まで帰ってこないため、犬の世話をしなければならぬと言っている。教室では、水彩画を描いている姿を見かける。飼育委員会に獣医が来校した日は、給食を食べて午後まで学校で過ごす。この日の午前中は、自分なりのペースで自主学習を行う。2ページを目標に行なっているようである。

第31週の水曜日から12月に入る。火曜日は、午前中を特殊学級の教室で過ごし、給食を食べずに下校する。ハムスターのかごに毛布をかぶせる等、動物に対しては熱心に関わっている。午前中に漢字ドリルを参考に自主学習をする姿が見られる。水曜日は、給食をB子と食べて午後の下校するが、木曜日は給食を食べずに下校する。担任が国語のプリントを2枚おいていたところ、持って帰っている様子であった。B子には、水曜日は給食を食べることになっていると話していたようである。

第32週、前の週の金曜日に渡した宿題は2枚ともやって持ってくる。学年レクリエーションには参加せず、いつもの教室で過ごす。B子が「体育を見学したら。」と誘ったところ、「どうしようかな。」と明らかな拒否はしなかったようである。担任と一緒に身長・体重を測ることができる。担任が「プリントを持ってこようか。何かリクエストある。」と聞くと、「何でもいい。」と答える。避難訓練への参加を担任と促すが、参加しなかった。この週の終わりには、目を治療中のウサギの

世話をするために、B子と8時以前に登校してくる。また、担任から渡された社会科のプリントに取り組む姿が見られる。

第34週、A子を様々な形で支えてきたB子が、2時間ほど保健室で過ごす。主訴は腹痛であったが、本人の話の中でA子をめぐる友達関係で悩んでいることが出される。修学旅行直後は、一人になったA子が心配だったため、B子だけが関わっていた。しかし、最近C子とD子がA子と仲良くなってきたため、仲間からはずされるようになってきているようである。A子の気持ちをどうとらえていいのか分からなくなってきているようであった。また、A子とB子は飼育委員会救護班としてウサギの世話をしていたが、同じ飼育委員会にいるM子とC子の態度が冷たいため救護班を止めたいと言っていたようである。C子とD子には、健康観察の時間に遅れる等、ルールが守れないところもあるとのことであった。担任が終日不在の日に、A子が在籍している学級の児童数名が保健室へ相談に行く。また、喧嘩が続けて起こる。この週で2学期が終了する。

(2) 考察

2学期後半は、11月後半の修学旅行から終業式までの時期である。この時期に特徴的なことの一つは、A子をめぐる友人関係に変化が観られたことである。

28週に行われた修学旅行中、同じ部屋の児童からは、A子をめぐる友人関係のトラブルが報告された。筆者らは、校長の理解を得て旅行へ随行していたため、担任と共に関係の調整を行った。A子の行動に同調するかのようになり、同じ学級の児童にも不安定な状況が出てくる。筆者は、給食と一緒に食べていた男子2名が、普段とは違う教室で食べる嬉しさからかふざけ合っていたのを注意したことがあった。この時は、衛生面で学校側がしている努力を伝え、できれば在籍学級の教室で食べるよう努力してほしいことも伝える。A子は、うなずいて聞いていた。

最後の週には、在籍学級が大変不安定な状態にあることが感じられた。そこで、学年主任の考えも取り入れ、学級全体への指導について検討がなされた。担任が不在の日には、緊急に集団カウンセリングの手法を取り入れた授業も行った⁸⁾。さ

らに、A子を支えるためには、B子への支援も必要になってくると思われたため、養護教諭にも協力を依頼して支援してもらった。

このような対応は、一見、場当たりのなものに見えるかもしれない。しかし、筆者らは、A子の問題と思われる状態は永遠と続くものではなく、いずれは減少あるいは消失していくであろうという見通しを持っていた。年度当初に確認ができていたことではあるが、表面に出てくる問題行動は、A子のこころの成長という面からすれば二次的な問題でしかないと捉えた。よって、未成熟さによって引き起こされる友人関係のトラブルを、どれだけ「よい思い出と呼ばれる範囲内」に押さえるかに対応の主眼を置いたのである。

この時期になされたこととして、もう一つ注目したいことは、父親と共に行った新たな目標の設定である。その話し合いを行うまでには、いくつかの手続きを踏んでいる。

まず、市の第2回不登校児童生徒対策委員会において市適応指導教室の先生より祖父母と父親との関係について情報を得た。祖父母からの話では、A子のしつけ面について苦勞しているとの訴えがあったようである。最近、特に祖父母に対する反抗的な態度が目立つ。祖父母がしつけをしっかりと関わろうとするが、父親のところへ逃げ込んでしまい、父親もA子を甘やかしているように見えるとのことであった。

次に、父親と連絡をとり、修学旅行が終わったことや冬休みが近いこと等から話し合いを持ちたい旨を伝える。父親も新たな目標を考えたいとの要望があり、日程の調整に入る。この時点で、関係職員で話し合いを行い、父親に示す大まかな方針を決める。A子の今後を考えると、第2次性徴期の始まり、本格的な思春期（反抗期）への突入など、危機的な状況が予想される。このため、父親、祖父母が同じ考えでA子へ接することが大切である。父親と祖父母との話し合いや意志疎通がうまくいくよう、学校側で支援をする。担任が中心となって個別に教科学習に関する取組を行っていく。算数については、特に小数、分数、割合に的をしぼって行う。思春期における健全な精神発達を支えるため、飼育委員会のことで日ごろから交流がある同性の職員が協力するといった提案を

行う事にする。

最後に校長室にて父親、教頭先生、担任、情緒教室担当者と話し合いを行う。中学校に向けて心配される学習については、個別の指導を行う。特に算数については、内容を精選し、学級担任が中心に個別の指導を行う。家庭では、学校でやったことを復習するような課題に取り組めるようになることを目標とする。思春期の危機に対応するために、父親と祖父母が協力して取り組むよう、話し合いを行う。父親と祖父母の関係が築きにくいところがあるので、学校側が支援し、それぞれの役割を自覚して接してもらうようにする。今後の短期的目標としては、午後まで学校で過ごすことを設定するといった内容が確かめられる。

以上のように父親や祖父母までを視野に入れた支援計画は、単に不登校状態を変化させるというだけでなく、A子のこころの変容を促すためにも重要であったと思われる。校長経験者の祖父にとって、A子の問題は教育関係者としての問題でもあったと考えられる。しかし、父親と支援チームとの関係が深まっていく中で、自然にそれまで自身が身を置いていた地域の教育界からリタイヤし、A子の祖父としての枠組みで考えられるようになっていったように思われる。このことは、父親と祖父母との関係をいわば投影していたものと考えられるA子の内面にも影響を与えることになったと捉えられる。

5 3学期

(1) 経過

第35週は、3学期初めの週となる。始業式の日には、登校時刻よりも40分ほど早く登校する。知的障害学級教室で飼っているハムスターやウサギの世話をしている。修学旅行ぐらいから仲がよくなったD子も一緒であった。次の日は、給食は食べずに4時間目に下校する。学期初日に登校したことを評価し、学級担任とも協力し休み中の様子や内面の変化をとらえることにする。3日目は、7時30分以前に登校し、動物の世話をする。2学期は、犬の世話をするため、早く帰宅していた。しかし、水曜日は祖父母がいるので、早く帰宅しなくてもよいと、午後までいることが多かった。この日も、2学期と同じ水曜日の過ごし方をし、給食を

食べて放課後まで学校で過ごす。翌日の木曜日も給食を食べ、放課後に下校する。木曜日も放課後まで残っていたことから、2学期に見られたような水曜日だけ午後まで残るというパターンが崩れている様子が見られる。本人の話では、現在は祖父母が毎日家にいるので、犬の世話をする必要がなくなったようである。給食については、担任の提案で在籍している学級の児童が毎日違うグループを編成し、一緒に食べることになったようである。A子が言語指導室を使用したいと依頼してきたので、置いてあるものには勝手に触らないこと、給食の後かたづけをきちんとすること、給食を食べる時だけ使用し昼休み時間をそこで過ごさないことを条件に使用を許可する。友達が望ましくない行動をとった場合はA子の方で注意するように言うと、「はい。」とうなずく。この週は最終日まで毎日登校し、生き物の世話をした後、算数の問題集に取り組んでいる姿を見る。同じクラスの女子2名も一緒にいる。第36週も同様な過ごし方をする。

第37週には、1日を在籍学級で過ごし、集団下校に参加する。第38週の2日目から2月に入る。この日は1時間ほど遅れてくる。情緒教室担当者とウサギの世話をを行った後、専科で児童のいない在籍学級の教室で2時間目終了時まで版画をする。3時間目以降は、級友と一緒に過ごす。風邪ぎみであることから、病院に行くように何度かすすめる。毎年の6年生が年間を通して行っている朝のボランティア清掃に参加し、一日を在籍学級で過ごす日も出てくる。

第39週、在籍学級で学習を行う姿が定着してくる。この時点で、通級指導教室の日誌からA子に関する記述は無くなる。6時間目にある委員会やクラブの活動に参加する姿が見られ、専科へも参加することができる。第40週も同様の様子が見られる。第41週は、全校児童が登校する時間帯である7時40分頃に一人で登校する。クラブの時間には、同じクラスのB子と情緒教室担当者が担当しているクラブに参加する。以前に参加したものは別のクラブである。初めは「はずかしい。」と言い、他の児童からは見えないところでB子と過ごしていた。第42週、この週から3月に入る。学校生活における全ての時間を、在籍している学級

で過ごせるようになった。

第43週、A子を中心とした4名の児童が、父母同伴が条件であるにも関わらず、子どもだけで校区外へ遊びに行ったようだった。A子に聞くと、保護者から行ってもよいと言われたとのことであった。第45週に行われた卒業式では、同学年の児童と共に式へ参加し、卒業証書を授与される。

(2) 考察

この時期には、在籍学級への復帰に向かう行動が次々と出現する。最後は、2つあった専科の一方だけに参加しない状態となった。ここで、筆者らは一つの現象へ過度に注目することを避けた。重要なことは、在籍学級での関係づくりであるため、まず在籍学級内で担任や級友と過ごす経験を適切に積ませることに重点を置くことにした。A子は、市の適応指導教室で中学生と知り合っているが、その生徒は専科担当者が担任した小学校4年生で不登校の状態になっていた。主な理由は、担当者が高圧的に児童へ接する面があるからであった。このため、A子が専科担当に対して持っているイメージは、あまり好ましいものではないことが予想された。専科担当者は、職員の中でも一番の年長者であり、受け持っている教科に関しては、普段から校内で指導的な言動を行なうことが多かった。このような自尊心の高い年輩の職員に対し、筆者らが指導力の問題を指摘することには、取組に資する面よりも危険性の方が高いと判断された。まず、専科担当者が自身の指導を正当化するために支援チームの取組を否定することが予想された。そのことによって、筆者らがA子に関わることが困難になる危険性もあった。専科担当者は、休み時間における職員間の会話でも中心になる存在であり、児童に対して職員を名指しで非難するような言動も観られていた。このようなことを考えると、専科担当者の持つ影響力をうまく活用することの方が重要だと思われる。そこで、専科担当者には、校長よりA子の状況とどのような接し方が望ましいかを説明してもらった。このことは、結果的に筆者らが同僚としての立場を越えて教師集団へ関わることやそれによって起こる摩擦を防ぐことになったと思われる。

在籍学級で一日を過ごすようになってからも、父親は学習の遅れについてずいぶん気にしており、

学校の決まりを守れないような姿も依然として見られた。そこで、長期的な不登校状態は変化したが、内面の不安定さや幼稚さは依然としてあると考え、継続的な支援について検討していくことにした。

以上のように、行動などに現れるA子の現象面だけに注目せず、A子の内面の変化に目を向けていくことで、支援チームにはある一定の傾向が生まれてきたと考えられる。一つは、結果よりもその過程や背景をみようとするため、状況の変化に一喜一憂したり焦ったりすることが少なかったものと考えられる。これは、特に担任の心理的負担を軽減することに役立ったように思われる。後半では父親にも同様の傾向が見られるようになった。二つ目は、好ましい状態の時にも油断をしないように心がけ、丁寧に児童をみていこうとしたことである。職員は、どちらかと言うと、問題行動が目立つ児童に注目しがちである。しかし、目立たないが不利益を被っている児童がいることも少なくない。今回の支援チームが帯びた一つの傾向は、本事例だけではなくこれからの教師集団の在り方にとってきわめて重要な側面を示していたものと考えられる。

6 中学校進学後の様子

A子は、在籍学級に復帰し、級友と同じように卒業式へ参加し、中学校へ進学していった。しかし、表面的な状態像だけを見て、A子の課題が解決したとは言いきれないため、引き続き中学校との連携に配慮することにした。

まず春休みに小・中の関係職員が集まり、話し合いを行った。その際に、できるだけ詳細にA子の小学校生活について引継を行った。引継の内容は、本稿で詳細に示した低学年からのトピックにも及んだ。

また、小・中学校が併設されていることを利用して両校の生徒指導主事間では、毎朝の登校指導の場において情報交換を日常的に行うようにした。情緒障害通級指導教室担当者は、毎朝校門前でA子の様子を観察し、必要に応じて声をかけ、中学校への情報提供を行った。

次に、中学校へ入学してからのA子の内面を探り必要な取組を提案する目的で、A子と同年年の

生徒98名に対し自尊心に関するアンケート調査を行った。この全体の結果とA子個人から得られた結果を比較・検討することにより、中学校へ進学した後のA子の傾向を把握することができると考えた。中学校へ依頼した際のアンケート実施の目的は「卒業生が自身に対して抱いている考えや感情を明らかにすることで、小学校段階で育てておくべき認識を探り、児童に対する卒業後までを見通した取組の充実を図る」ことであるし、アンケートの項目については、高山（1992）を参考に行った。

集計にあたっては、各質問項目で「いつもそう思う（いつもそうだ）」に回答した場合を2点、「ときにはそう思う（ときにはそうだ）」に回答した場合を1点、「ほとんど、そう思わない（ほとんどそうではない）」に回答した場合を0点として得点化した。ただし、質問項目によっては、逆数をとるものもあった。各項目の点数範囲は2～0点であった。そして、全般的尺度、学業尺度、身体尺度、家族尺度、社会尺度、虚構尺度の各尺度（領域）ごとに合計得点を出した。ここでの点数範囲は20点～0点であった。さらに、合計点を5倍し、100点から0点の範囲で位置づけた。各領域ごとの全体における平均得点と標準偏差は、図3のような結果となった。

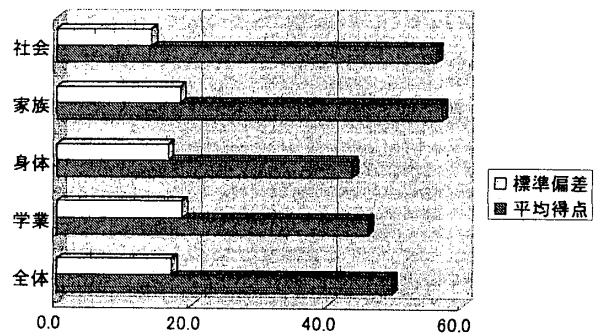


図3 自尊心アンケートの各領域における平均得点と標準偏差

身体尺度や学業尺度に比べると、社会尺度と家族尺度が比較的高く6割程度の自己評価を行っている結果となった。このことから、A子と同じ学年の生徒は、「友達や家族から自分は大切に思われている。」「認められている。」「うまくやっている。」と考えている傾向が強いことが予想された。

また、標準偏差は、どの領域においても20近くあった。このため、生徒によって自尊心の発達に差があると思われた。試みとして全体尺度と各項目との相関を算出したところ、家族尺度と全体尺度とが+0.7となった。家族から受け入れられ必要とされていると感じている生徒は高い自尊心を持ちやすい傾向を持っている可能性が示唆された。

以上、A子と同学年の中学1年生全体の傾向を把握した上で、A子個人の得点と全体の平均得点との比較を行なった（図4）。

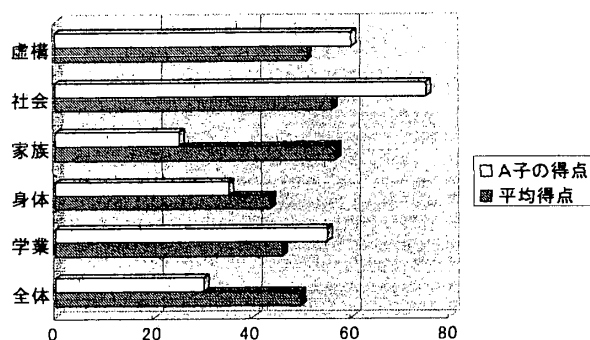


図4 全体の平均得点とA子の得点

全体の平均得点に比べてA子の得点が特に低かったのは、家族尺度であった。このことから、A子は、家族から受容されておらず、家族に迷惑をかけていると感じていることが予想された。不登校状態の時には、父親と祖父母との関係にうまくいっていないことがあったが、このような養育に対する認識の不一致を含め、A子の家族関係に対しては中学校進学後も継続的な配慮が必要だと判断した。その一方で、社会尺度では、大変高い得点となっていた。A子は、友人から受け入れられていると実感しており、友人関係の中で日々を楽しく過ごし、充実させていることが予想された。中学校生活においても望ましい友人関係を維持できることは、A子の精神発達に大変重要な意味を持つと思われた。

以上の結果を中学校に伝えたところ、生徒指導主事を中心に話し合いを持ち、ホームルーム担任や部活動の顧問によって友人関係の調整に配慮がなされた。その後、卒業から2年近くが経過する中、A子は現在も無遅刻無欠席を続けている。

V まとめ

これまで中学校での経過も含めて観てきたように、本取組で筆者らが特別な支援として行ったことは、第一に事例に対する状態の捉え直しを繰り返したことだと考えられる。その根底には、ここに注目しようとする姿勢があったことは言うまでもない。例えば、取組を始める前年の様子として観られる土曜日だけの校長室登校を、筆者らは学校のリズムに従おうとする気持ちの現れだと捉えた。廊下を三輪車で走り回る行動は、押さえ込んでいた幼児性の解放だと捉えた。そして、学校の決まりを守らない行動であるので止めさせなければならないという捉え方に対し、在籍している教室へ復帰する準備段階として父親以外にも甘えられる存在を必要としているという捉え直しを行なった。このように、筆者らはA子と関わる時にはまず、いわゆる「資源」を探すようにした。ここで言う「資源」とは、その時点でできていること、すでに持っているもの等の中に存在する解決に向かうために利用できる要素であると考えられる。筆者らはまず資源を探し出した後、次に新しく解決に近づく要素と結びつけるような工夫を行なった。4月の段階で考えられたA子の持つ傾向面での資源は、あらかじめ設定された予定に従って行動する傾向が強いことであった。このため、事前に話し合いを行ない納得していれば新しいことへの挑戦もある程度可能ではないかと予想した。次には、自宅で室内犬を飼っていることやウサギの世話を好んですることに注目した。そして、言語教室担当者が備えていた飼育委員会担当者であることに加えて生き物が好きで知識も豊富だという資源と結びつけた。また、将来の夢が保母であることもA子の備えている個性的な資源として考えられた。そこで、入学式準備における1年生教室の飾り付けを依頼したり知的障害特殊学級児童への援助を提案したりした。これらのことは、その後、教科学習への取組という新たな資源を形成することになる。

支援チームとして取組を進めていく中では、このような事例の状態への捉え方が発展していき、品物や物的環境が備えている性格にも注目するようになっていった。例えば、児童用の机や椅子は、

在籍している教室の性格を帯びており、特にA子が緊張を感じる教科学習を象徴しているものと捉えられた。また、1学期末に担任が手渡した通知票は、A子にとって「自分が担任から評価を受ける」ということを象徴していると考えた。他にも靴箱や学級通信などについても、A子にとって何を意味するのかといった話し合いを詳細に行なった。そして、A子と品物をどのように出逢わせるのが望ましいかについてひとつひとつ吟味していった。このように観てくると、本取組では「ことば」によるアプローチ以外にも様々な試みがなされたと考えることができる。A子は、「ことば」によらない関わり合いの中で、膠着状態を乗り越えてきたとも言える。特別にデザインされた品物に出逢うことは、A子におだやかな気づきをもたらし、自己決定を促す機会となったと考えられる⁷⁾⁹⁾。

以上のように、本稿では特に対象事例の行動変容について詳細に述べてきた。今回、支援チームがたどった経過を見ると、当初に設定したところに注目していこうとする姿勢が一貫してみられる。これは、学級担任制によって教師一人一人に強固な理念が形成されやすい小学校においては、非常に貴重な経過だと捉えることができる。そして、初めの対象の部分で触れたように、本事例を報告した意義はまさにここにあると考える。専門家として観れば解決の方法は明確であっても、それを実際に導入することを拒む状況はどのような環境であれ、何かしら存在するからである。取組が進む中では、直接関わるのが少ない職員から疑問や批判も寄せられた。しかし、そのような場合にも支援の方向性は、変わることなく常に一定であった。これは、職員間の関係を調整する機能が支援チーム内に存在していたからであろう。このように学校というひとつの組織の機能から本取組をみていくことで、特別な支援教育を考える貴重な概念が得られたものと考えられる。

謝 辞

本研究は、学校現場における実践的な研究である。

まず、筆者らが継続的に関わることを受け入れ成長しようとする姿をみせていただいたA子とご

家族に、心より感謝すると共に今後の幸せを祈ります。また、校長先生をはじめ諸先生方は、本研究の良き理解者であり支援者、共同実践者でもありました。特に、在籍学級担任の麦田哲之先生とは、日々の悩みや苦労を共にさせていただきました。本当にありがとうございました。

文 献

- 1) 少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議 (2001). 心と行動のネットワークー心のサインを見逃すな、「情報連携」から「行動連携」へー
- 2) 21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議 (2001). 21世紀の特殊教育の在り方について～一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方について～ (最終報告)
- 3) 国立特殊教育総合研究所 (1996). 心身障害児の個別指導方法に関する実証的研究
- 4) 国立特殊教育総合研究所情緒障害教育研究部 (1998). 全国小・中学校情緒障害特殊学級及び通級指導教室についての実態調査報告書
- 5) 石本隆士、緒方茂樹 (2002). 通常の学級に在籍する児童への特別な支援教育 (Ⅱ)ー支援組織の役割と在り方ー. 琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要、第4号、(投稿中)
- 6) 山本和郎 (1997). コミュニティ心理学ー理論と実践ー、ミネルヴァ書房
- 7) 傳田健三 (1998). 子どもの遊びと心の治療、金剛出版
- 8) 國部康孝 (1998). 育てるカウンセリング考え方と進め方、図書文化社
- 9) 宮田敬一 (1998). 学校におけるブリーフセラピー、金剛出版